

中国の変化見えた開会式演出

北京冬季五輪が本日幕を閉じる。コロナ禍の下、厳戒態勢が敷かれる中で举行された2月4日の開会式から、あっという間の17日間だった。

2008年の夏季の北京五輪に続き、開会式の総監督は映画監督の張芸謀氏だった。五輪は国家的行事だ。演出にはもちろん中国共産党当局の意向も反映され、最後にはその承認がなければならなかっただろう。それでも、党中央宣伝部であれば浮かばないであろう発想に満ちていて、開会式は興味深かった。

張芸謀氏は「活きる」、「妻への家路」など、現代中国の政治運動の非情さと不条理をテーマとした映画を何本も撮ってきた。近作「ワン・セカンド（一秒鐘）」の主人公は、文化大革命の最中、造反派の頭目と喧嘩したことにより西北地方の労働改造所に送られる。自分の娘が故郷で食糧袋を担いで運び、人民に奉仕する姿が一秒ほどだがニュース映画に映っていると知らされ、逃げ出して必死になってその映像を見ようとする物語だ。

だが、「ワン・セカンド」はベルリン国際映画祭への参加を取り下げられた。映画のオリジナル版では、娘がニュース映画の撮影後、重い袋を担いでいたため事故に遭って亡くなったことを主人公は知らされていた。だが、それでは時代を暗く描き過ぎると当局の横槍が入ったのか、後に中国で公開された際にはその部分が削除されていた。さらに、文革が終了して主人公は釈放され、大学入試が再開されるという明るいエピローグが補充された。

アリババの創業者であるジャック・マー氏へのバッシングに見られるように、中国の権力者と経済人の関係は微妙だが、文化人もその例外ではない。だが、張芸謀氏が「愛国者」であることも疑いないだろう。日中戦争を題材にした映画も撮っているし、08年の夏季オリンピック開会式でも中国の伝統文化を前面に出した国威発揚的な演出をしていた。ただ、そこに社会主義の要素はほとんど無かったが。

そうした複雑な背景に照らすと、開会式の面白みが増す。選手入場の際に使われた音楽は、いわゆる西洋の古典音楽だった。ビゼーの「カルメン」やチャイコフスキーの「くるみ割り人形」、そして英国の第二の国歌とも言われるエルガーの「威風堂々」などが繰り返し流された。いわばナショナリズム全開の開会式を望んでいた人もいたかもしれないが、張氏はそれを避けたのだ。

習近平国家主席による開会宣言の後に流れたのは、驚いたことにジョン・レノンとオノ・ヨーコの「イマジン」だった。昨年7月の東京五輪開会式でも使われ、12月、先進7か国（G7）外相会合がリバプールで開かれた際、林芳正大臣が夕食会場のビートルズ・ストーリー博物館で即興のピアノ演奏を披露した曲だ。

そして極め付きは、開会式のクライマックスとも言うべき聖火の点火だった。08年の北京五輪では、往年の体操の名選手が競技場の空中を走り、巨大な聖火台に点火する派手な演出が行われた。だが今回は、各国選手団の入場行進の際に掲げられていた、出場選手の名前と国名が記された雪の結晶が組み合わされ、トーチがその真ん中に差し込まれて、そのまま

小さな聖火台となった。張氏本人によれば、低炭素と環境保護を訴えたというが、社会の価値観の転換を象徴的に促すように見えた。

北京夏季五輪より14年が経ち、開会式の演出には中国の変化が反映されたと言えるだろう。前回は、中国の伝統や発展を世界にアピールすることが目指された。子供に「ロパク」で歌うふりをさせ、CGの花火を画面上に派手に打ち上げた。だが、今回登場したのは作り物ではない、いわば自然体の子供たちだった。中国人が自信をつけたことが張氏の演出に変化をもたらしたと言ってよいだろう。

ただ、政治は相変わらずであり、統制が強化されている面もある。聖火リレーの最終ランナーに漢族の男性とウイグル族の女性が選ばれたのは、人権問題への海外の批判を意識したの事だろう。開会式は、米英加などが代表を送らない「外交ボイコット」を行ったことでも注目された。聖火は消えるが、中国社会のさらなる変化への期待の灯は燃やし続けたい。